

上司小剣「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載の事情

——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から——

荒井 真理 亜（関西大学東西学術研究所）

はじめに

上司小剣の代表作の一つに「東京」がある。「東京」は、第一部〈愛欲篇〉、第二部〈労働篇〉、第三部〈争闘篇〉、第四部〈建設篇〉からなる長篇小説である。上司小剣自身が「『東京』は一生の仕事」（『新潮』第35巻6号、大正10年12月1日）の中で「これ（引用者注・「東京」をさす）が私の一生のほんたうの仕事のやうな気がしてゐます」と述べたように、「東京」は大正十年から昭和二十二年まで約二十七年にわたって書き継がれた。

「東京」は、口笛の天才である春田影彦という青年が、大阪から上京し、恋人の濱江、その父で史学者の海野三郎、同郷の先輩で画家の吉松栄、女流作家の岩村小夜子らと交わりながら、東京で生きていく姿を描いている。しかし、上司小剣の主眼は、「偶然に集合した多くの人間が、うよく／＼蠢いてゐるだけ」の東京を「活きたる生命ある、一つの大きな有機体」として描くことにあつた（「序」『東京第一部 愛欲篇』大正10年12月25日、大鑑閣）。上司小剣の都市観や社会に対する改良意識が随所に表われており、ジャーナリストでもあつた上司小剣の観察眼が発揮された作品である。

『近代文学研究叢書62』（平成元年6月5日、昭和女子大学近代文学研究所）の「上司小剣」の解説には、『東京』は、大正八年九月に

読売新聞社を退社すると同時に腹案をたて、長大な構想の四部作として晩年まで書き継がれた長篇小説である」とある。しかし、上司小剣は「『東京』に就て」（『長篇文学全集第16巻 上司小剣篇』）「長篇小説月報」第9号、昭和3年11月1日、新潮社）の中で、『東京』を書かうと思つたのは、大正五年頃であつた。それから、少しづつ準備をしてゐたが、時代の遷り変りとも、材料もまた違つて来て、初めに集めた材料はだいたい棄てた。いよく／＼来年から：と、しつかりペンを握つて、力を入れつゝ考へたのは、大正九年の暮であつた」と述べている。つまり、上司小剣は読売新聞社を退社する以前から既に長篇小説「東京」を構想し、準備していたのである。

「東京」第一部〈愛欲篇〉は、「東京朝日新聞」に大正十年二月二十日から同年七月九日まで計一四〇回連載された。この間に休載はない。連載時のタイトルは「東京」のみで、それが四部作の第一部であることや〈愛欲篇〉であることは明記されていない（以下、本稿では第一部を他の部と区別するため、「東京」〈愛欲篇〉と表記する）。挿絵は、上司小剣の「森の家」（『婦人公論』大正8年6月、同9年3月）、「花道」（『時事新報』夕刊、大正9年4月5日、同年9月11日）の挿絵を担当した石井鶴三である。石井鶴三の挿絵は、大正十年五月三十一日と同年七月五日以外は毎日掲載されており、

計一三八点に及ぶ。石井鶴三は「東京」〈愛欲篇〉の挿絵によって挿絵画家として広く世に知られた。

信州大学所蔵石井鶴三関連資料には、「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載に関する書簡が八通（石井鶴三宛上司小剣書簡6通、石井鶴三宛土岐善磨書簡2通）ある。本稿では、これらの書簡を紹介しながら、「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載の事情、小説家と挿絵画家の共同作業の様子や両者の間に介在する新聞社の役割を明らかにしていきたい。

また、信州大学所蔵石井鶴三関連資料から、上司小剣の「花道」に関する書簡も新たに六通発見されたので、拙稿「上司小剣『森の家』『花道』の挿絵と装幀に関して―石井鶴三宛上司小剣書簡から―」（信州大学附属図書館研究」第1号、平成24年3月31日）の補遺として、本稿の最後にあわせて紹介する。

一、「東京」〈愛欲篇〉新聞連載のいきさつ

石井鶴三の「上司小剣―心に残る寸語雙語」（「朝日新聞」昭和42年12月19日）によれば、「東京」〈愛欲篇〉の連載にあたり、上司小剣から「これは私の生涯の作品となるかも知れぬ大事な仕事だから、ぜひ挿絵をかいてもらいたい」という手紙をもらったという。

その時の書簡が、①石井鶴三宛上司小剣書簡である。

①石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1―26」）

一月十三日

石井鶴三様

賀正

上司小剣

目下『花道』の校正に忙殺されて居ります。二ヶ所の印刷屋でやつて早く出さうとしてゐるのですから、校正が大変です。小さくかいていたゝいた画の入れ場所がめちやく／＼で困つて居ります（玄文社の方で入れちがへたのです）

偖もう一つお願いがありますが、来月の中旬頃から、小生は東京朝日新聞に長編を書きますが、これは『花道』などとまた別のもので、『東京』と題する長編で、取り敢へず其の前編に取りかゝらうとするのですが、小生一生の仕事にしたいつもりで、読売の新年号に『今年は何を書くか』の題下「不明一字 ミセケチ」の質問に『東京』を書きたいと答へておきましたところ、それを『朝日』で見ても、是非朝日新聞に「改ページ」

載せよといふ交渉がありまして、小「生 ミセケチ」生はもう少し準備をして四月頃からと思つたのですが、朝日ではもう少し早くとの事で、到頭来月から同紙の小説欄へ出ることにしたのでございます。

そんな次第で、もともと最初から本

にする目的「つもり ミセケチ」のもので、小生は一生懸命にそれにかゝるつもりですが、其の

挿し画に是非また貴兄のお骨折り

を煩はしたいと思ふのですが、御都合い

かゞでせうか。尤も今度は一日くいで

なく前に少しまとめて書いておきたい

と思ひますから、御旅行を妨げる「やうな 左傍挿入」こと

はあるまいと「不明二字 ミセケチ」存じます。

『東京』といふ、人間の偶然の集

合場所の雑然とした色合ひを主に

して書かうとするもので、小生には一生の仕事

のつもりでございますから、私の最も

敬愛する貴兄の画がいたゞければ非

常に有り難いのです。いづれ朝日社の方から

お願ひに出るやうに言つておきましたが、先づ

小生から御内意を伺ひたいと存じます。

御都合もありませんが、成るべく

御承諾下さ「ら 左傍挿入」ば小生の喜びは非常です。

封筒表の宛先は、「府内。田端二八二。／石井鶴三様」である。消

印はない。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣」(印)

である。封筒裏には上司小剣によって「一月一三日夕」と記されて

いるので、大正十年一月十三日に書かれた手紙である。便箋は二枚

で「東京文房堂製原稿用紙」を使用し、本文はペンで書かれている。

上司小剣は「目下『花道』の校正に忙殺されて居ります。二ヶ所

の印刷屋でやつて早く出さうとしてゐるのですから、校正が大変

です」と愚痴をこぼしている。この時、上司小剣は「時事新報」に

連載した「花道」を玄文社から出版するため、小説本文の校正中で

あつた。玄文社は出版を急いでいたようで、一冊の本を二か所の印

刷所で刷ろうとしていたらしい。

また、「小さくかいていたゝいた画の入れ場所がめちやくで困

つて居ります(玄文社の方で入れちがへたのです)」というので、玄

文社のミスで石井鶴三の挿絵が適切な箇所に入らされていないこ

とを報告している。

①の書簡から、単行本『花道』を刊行する際、小説家と装幀家と

出版社の共同作業が順調に進んでいなかった様子が窺える。

①の書簡で次に注目されるのは、上司小剣が「小生一生の仕事に

したい」という「東京」の挿絵を石井鶴三に依頼していることであ

る。

上司小剣の「挿絵画家は作家の女房」(読売新聞)大正10年3月

13日)によると、上司小剣は「初めは絵などはどうでもいゝと思つ

てゐた」が、石井鶴三に「森の家」の挿絵を描いてもらつて、「小説

の挿絵といふことに対する考へ方が大変に重く」なつたという。石

井鶴三が「花道」の挿絵や装幀を担当することになつたのも、上司

小剣が石井鶴三を指名したからであつた。上司小剣はこれらの挿絵

や装幀を通して、石井鶴三の仕事ぶりに全幅の信頼を寄せていた。

だからこそ、自ら手紙を書き、「一生の仕事のつもりで」取りかかつ

た「東京」の挿絵を、「敬愛する」石井鶴三に懇請したのである。上

司小剣は、石井鶴三が挿絵を描くにあたり、「作中に出る人物の性

格だとか、作の奥にある思想、それから背景に用ひられる土地と

いふやうなこと」(前掲 上司小剣「挿絵画家は作家の女房」)を重視することを知っていたので、自分がこれから書こうとしている小説が『東京』といふ、人間の偶然的集合場所の雑然とした色合ひを主にして書かうとするもの¹⁾だということをあわせて記しておいたのである。

①の書簡で、上司小剣は「東京」〈愛欲篇〉を「東京朝日新聞」に連載することになったいきさつを「読売の新年号に『今年は何を書かか』の題下の質問に『東京』を書きたいと答へておきましたところ、それを『朝日』で見ても、是非朝日新聞に載せよといふ交渉がありました」と説明している。

上司小剣の『東京』に就て²⁾(前掲)によると、大正九年の「大晦日の夜半十二時頃」に、「至急報の『ウナ』電報」が届き、「披いて見ると、東京朝日新聞社から、『チヨウヘン(トウキョウ)アサヒニイタダキタシサイフミ』と」あったという。

当時「東京朝日新聞」で社会部長をしていた原田讓二は『東京』の頃³⁾(『長篇文学全集第16巻 へ上司小剣篇』)「長篇小説月報」第9号、昭和3年11月1日、新潮社)の中で、大正九年の大晦日に東京朝日新聞社の編集室で諸新聞を漁っていた土岐善麿が「或る新聞の文芸消息欄から」上司小剣が「東京」という長篇小説を書くという記事を発見し、「ではこつちへ取らうではないかといふことになつて、早速デンポウで註文を」したのだと語っている。

土岐善麿が見つけた「或る新聞の文芸消息欄」の記事とは、大正十年一月一日、「読売新聞」に掲載された上司小剣の「今年は何を書かか—長篇『東京』」である⁴⁾。

この「読売新聞」の記事は、「丁度読売新聞から年末の恒例で、『来年は何をする?』といふ往復葉書の問ひ合せがあつたので」、上司小

剣が「躊躇するところなく『東京を書く』といふ返事をした」(前掲『東京』に就て)ものである。

上司小剣は「今年は何を書くか—長篇『東京』」の中で、「私の一生の小さな事業中、これだけは不朽とまでに行かずとも、三十年や五十年ぐらゐ後に残したい」と、「東京」の執筆に対し、並々ならぬ意気込みを語っていた。しかし、「五枚でも十枚でも、或は百枚でも、今年のうちを書くことが出来たら、私は大きな悦びをもつて、来年を迎へることが出来ませう。しかしまだどうも駄目のやうな気がしてゐます」とも述べているので、上司小剣の大正十年の目標は「東京」を起筆することであり、上司小剣自身は「東京」を急いで発表する気はなかつたのである。

①の書簡から、上司小剣は「東京」を「もともと、最初から本にする目的」であつたことがわかる。「東京」の連載に先立ち、上司小剣は「東京朝日新聞」に『東京』を書くに就て⁵⁾(大正10月2月18日)という一文を寄せているのだが、その中で、「東京」は新聞に連載するつもりではなかつたので、「東京朝日新聞」に「東京」の連載を依頼された時、「東京」が「新聞の続きものになるかどうかを危んだ」と述べている。しかし、「新聞の続きものといふ一種の型」を「打ち破るのも妙ではないか」という新聞社の説得に応じて、連載を引き受けることにしたらしい。

原田讓二や土岐善麿にとつて、上司小剣は「新聞の手ほどきをして貰つた人で」(前掲 原田讓二『東京』の頃)あつた。上司小剣は明治三十年三月に読売新聞社に入社し、大正九年九月まで約二十四年間在社、社会面の記者から出発し、社会部長、文芸部長、婦人部長、編集局長を歴任した新聞人でもあつた。原田や土岐も東京朝日新聞社に入社する以前、読売新聞社に勤めていたことがあり、そ

ここで上司小剣から「新聞の手ほどき」を受けたのである。

原田讓二は「新聞のコツを知りぬいてゐる」上司小剣なら「へまな新聞小説を書くことは」ないという安心があったという。しかし、原田と土岐が上司小剣に「東京」の連載を依頼した理由は、別にあったようである。

原田讓二の『『東京』の頃』（前掲）によると、「その頃、新聞小説といへば、長田幹彦氏全盛」であったが、原田と土岐は「何とかして顔ぶれを変へたいものだ」と考えていた。

長田幹彦（1887—1964）は、「滯」（『スバル』明治44年11月〜同45年3月）や「零落」（『中央公論』明治45年4月）で文壇に登場し、情話作家としてもはやされた。しかし、赤木桁平の「『遊蕩文学』の撲滅」（『読売新聞』大正5年8月6、8日）で「贗造芸術」と批判され、以後文壇を離れて作品は通俗化していった。この頃から、新聞小説の執筆も増え、「虚栄」（『時事新報』『大阪時事新報』大正5年11月9日〜同6年5月8日）、「港の唄」（『読売新聞』大正5年12月24日〜同6年6月2日）、「残る花」（『福岡日日新聞』大正6年8月28日〜同7年4月13日）、「続金色夜叉」（『やまと新聞』大正6年8月29日〜同7年4月11日）、「不知火」（『大阪朝日新聞』大正7年4月14日〜9月5日）、「若き妻」（『報知新聞』大正7年7月22日〜同8年1月17日）、「呼子鳥」（『福岡日日新聞』大正7年10月28日〜同8年6月12日）、「白鳥の歌」（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』大正8年8月15日〜同9年3月13日）、「恋ごろも」（『報知新聞』大正9年1月19日〜9月20日）、「地獄」（『万朝報』大正9年1月29日〜9月11日）などの作品を発表している。原田讓二の証言通り、確かに大正十年頃「新聞小説といへば、長田幹彦氏全盛」であった。

「東京朝日新聞」でも、上司小剣の「東京」の前には、長田幹彦の

「闇と光」（大正9年6月21日〜同10年2月29日、計240回）が連載されており、渡部審也が挿絵を担当していた。原田と土岐は、長期にわたる「闇と光」の連載でマンネリ化した小説欄を、今まで「東京朝日新聞」紙上に登場したことの無い、新しい顔で刷新したかったのではないか。

上司小剣は、大正三年一月「ホトトギス」に発表した「鱧の皮」で文壇における作家的地位を確立し、「東光院」（『文章世界』大正3年1月）、「兵隊の宿」（『中央公論』大正4年1月）、「父の婚礼」（『ホトトギス』大正4年1月）などの秀作を次々に発表していった。その後も、毎月のように「文章世界」「中央公論」「新潮」「新小説」「太陽」「早稲田文学」などの雑誌に小説を載せている。今日ではあまり注目されていない上司小剣だが、雑誌で「上司小剣論（作家論の五）」（『文章世界』大正6年5月）や「上司小剣氏の印象（人の印象（十一））」（『新潮』大正6年12月）などの小特集が組まれたり、文芸時評で毎月のように作品が取り上げられたりと、大正中期には純文学の花形作家だったのである。

この頃の上司小剣について、青野季吉は『鱧の皮』で世評を勝ち得、さらに『父の婚礼』に集められた短篇共を発表し、長篇『お光壮吉』を世に問ふていた小剣は、私の眼には仰ぎ見たいやうな歴史した作家であった。また文壇的にもほゞそれに近い存在になっていた（『解説』『木像（文潮選書6）』昭和23年6月15日、文潮社）と回想し、宇野浩二も「上司小剣の全盛期（といふものがあれば、それは大正三四年から十年ぐらゐまで）」「その間の七八年か十年ほどが、小剣が、まづ『歴とした作家』として存在した時代」（『解説』『鱧の皮他五篇（岩波文庫）』昭和27年11月5日、岩波書店）であったと述べている。

当時、新聞小説は新聞の売れ行きをも左右する、いわば新聞の目玉であった。新聞社としては、読者に広く受け入れられる作家に小説を書かせる必要があった。そろそろ長田幹彦の小説に物足りなさを感じるようになっていた読者を満足させるために、「東京朝日新聞」は作家としても円熟し、文壇の第一線で活躍していた上司小剣を起用したのであろう。

二、「東京」〈愛欲篇〉新聞連載の準備

①の書簡による「東京」の挿絵の依頼に、石井鶴三は承諾の手紙を出したようだ。それに対する礼状が②石井鶴三宛上小剣書簡である。

②石井鶴三宛上小剣書簡（仮番号「高1—32」）

お手紙拝見。早速御承諾下さいます有り難く存じます。来月初めに転地して書き初めるつもりでございます。帰つてからゆつくりお目にかゝつて、いろいろ御相談やらお願ひやら、いたしませう。不取敢お答へまで、草々。

一月二十三日

上小剣

石井様

封筒表の宛先は「府下。池袋一〇四一／石井鶴三様」、消印の日付は大正十年一月二十三日、時間や地名は判読できない。封筒裏の出人は「東京、下目黒四二二／上小剣（印）」である。封筒裏には上小剣によつて「一月二十三日」と記されている。便箋は一枚で「東京文房堂製原稿用紙」を使用し、本文はペン書きである。

上小剣は「来月初めに転地して書き初めるつもりでございます」と知らせている。「書き初める」というのは「東京」〈愛欲篇〉のことである。上小剣は「東京」〈愛欲篇〉を書くために「転地」した理由を、「『東京』を書くに就て」（前掲）の中で、「東京に居て『東京』を書くのは、舟に乗つてゐて其の舟を描かうとするやうな気がしたから、少し離れたところから東京を観ながら筆を着けやうと思つて、私は二月早旅に出てみた」と述べている。

上小剣が二月の何日に「旅に出」たのかはわからない。しかし、大正十年二月十七日の「読売新聞」の「よみうり抄」には「上小剣氏 本日森ヶ崎から帰る」とあるので、上小剣は大正十年二月十七日頃まで森ヶ崎に行つていたことがわかる。当時、森ヶ崎（現・東京都大田区大森南）には鉱泉と海水浴場があり、東京近郊の保養地として賑わつていた。なお、大正十年二月十七日頃に森ヶ崎から帰つてきた上小剣は、その後再び森ヶ崎に出かけたようで、大正十年二月二十三日の「読売新聞」の「よみうり抄」には「上小剣氏 森ヶ崎大金に投宿中」とある。

②の書簡には「帰つてからゆつくりお目にかゝつて、いろいろ御相談やらお願ひやら、いたしませう」とあるが、「東京」〈愛欲篇〉に関する「御相談やらお願ひやら」は、上小剣と石井鶴三だけではなく、新聞社の担当者も同席して行なわれたようである。

まず、石井鶴三が「東京」〈愛欲篇〉の挿絵を内諾したことで、東

京朝日新聞社から石井鶴三に正式な依頼があった。それが、③石井鶴三宛土岐善磨書簡である。

③石井鶴三宛土岐善磨書簡（仮番号「高1—37」）

まだお目にかゝりませんので、参上して種々お打合せ致すべきで「すが 左傍挿入」、只今夕刊発行準備で忙しく、とりあへず手紙で申あげます

今回は上司小剣君の「東京」を連載することになりまして、その挿画は特に あなたを お煩しするやう上 司君の希望もあり、社としても非常に喜ばしいことで、既に御内諾済みになつた趣を上司君から伝へられ、小生等もうれしく思つて居ります、どうぞ何分よろしくお願ひ致「改ページ」

ます、いづれ載せはじめる時になりますれば、お目にかゝつて詳しく御話も伺「たく思ひ 左傍挿入」ます、とりあへずお礼かたぐい 尚ほ小説挿画の件に就ては社会部長の原田譲二君並に同じ部の小生、将来は根本房光君などお打合せ致すことゝなりますから、これも予め御承知お願ひます

とりいそぎ 早々

土岐善磨

石井鶴三様

大正十年一月二十八日

親展で出された封筒表の宛先は、「市外、池袋千四十一／石井鶴三様」、消印の日付は一月二十八日（年は判読できない）、時間は十時から十二時（午前か午後かは判読できない）、地名は「芝」である。封筒裏の差出人は「東京市京橋区瀧山町四番地／東京朝日新聞発行所／土岐善磨」である。東京朝日新聞社用の封筒を使用しており、封筒裏には「大正十年一月二十八日」と記されている。東京朝日新聞発行所の住所の他に、電話番号と振替口座の番号も記載されている。封筒裏は、署名と日付の数字のみ肉筆で、その他は印刷である。便箋は二枚で「東京朝日新聞発行所用箋」を使用し、本文はペンで書かれている。

土岐善磨は「社としても非常に喜ばしいことで」「小生等もうれしく思つて居ります」と礼を述べている。

しかし、原田譲二は、『東京』の頃（前掲）の中で、「東京」〈愛欲篇〉の挿絵を担当した石井鶴三について、次のように述べている。

石井鶴三氏の挿画が、在来の型を破つて、清新の気をみなぎらせました。画家は作家自身が選んだもので、恐らく石井氏の新聞小説挿画は、これが初めてであつたでせう。挿画家としての石井氏の発見は、全く上司氏の先見によるものです。

石井鶴三が新聞小説の挿絵を手がけたのは「東京」〈愛欲篇〉が最

初ではない。しかし、原田讓二は「東京」〈愛欲篇〉で、初めて石井鶴三の挿絵に接したのであろう。

東京朝日新聞社は、既に石井鶴三を挿絵画家として注目していたから、石井鶴三が「東京」〈愛欲篇〉の挿絵を引き受けてくれて「社」としても非常に喜ばしい」というのではないようだ。

東京朝日新聞社は、新聞小説に上司小剣の「東京」を採用したのと同じ理由で、つまり紙面の刷新のために、新しい挿絵画家を求めたのではないだろうか。挿絵は活字より先に読者の目に飛び込んでくる。新味のある小説を掲載しても、挿絵が同じだと紙面の第一印象に変化がない。石井鶴三が挿絵画家として新進だったことが、「社」としても非常に喜ばしいことであつたと考えられる。そのような新聞社の期待に答え、石井鶴三の挿絵は「在来の型を破つて、清新の気をみなぎらせ」たのである。

③の書簡で、土岐善麿は「尚ほ小説挿画の件に就ては社会部長の原田讓二君並に同じ部の小生、将来は根本房光君などお打合せ致すことゝなりますから、これも予め御承知お願ひます」と知らせている。注目されるのは、「小説挿画」の担当者が、社会部の部長や部員であつたことである。

土岐善麿が「参上して種々お打合せ致すべきですが、只今夕刊発行準備で忙しく、とりあへず手紙で申あげます」と断つているように、「東京朝日新聞」は大正十年一月二十五日に社告で夕刊を発行することを発表し、二月一日から夕刊の発行を開始した。紙面を朝刊と夕刊を合わせて十二頁に拡充し、定価も朝刊夕刊月極一円十銭に改定した。夕刊の発行によつて紙面に余裕が出来た朝刊は、経済や学芸に関する記事が増えている。しかし、文学や演劇、美術関係の記事を担当していたのは、社会部であつた。だから、当時、社会部長で

あつた原田讓二や社会部記者であつた土岐善麿が新聞小説の依頼や段取りを行なつていたのである。なお、「東京朝日新聞」に「学芸欄」が出来るのは、もう少し後の大正十一年二月二十四日からである。翌十二年十月には、社会部学芸係から課に昇格し、土岐善麿が学芸課長に就任した。さらに十三年四月に、学芸部として独立し、土岐は学芸部長になつた。

土岐善麿が③の書簡で予告していた「お打合せ」の日時と場所を知らせたのが、次の④石井鶴三宛土岐善麿書簡である。

④石井鶴三宛土岐善麿書簡（仮番号「高1—49」）

拝呈

今晚上司小剣氏に逢

ひました、小説「東京」

に就き、あなたと上司氏

と種々御打合せの機

会をつくるため、来る

十六日午後四時、上「改ページ」

司氏は「東京朝日」迄

来られることを約束され

ました、遠路で御迷

惑とは思ひますが、同日

回刻、当方へお運

び下さいますやう

お願ひ申上げます「改ページ」

委細拝顔万々申

上げます 敬具

土岐生

石井様

大正十年二月十二日

封筒表の宛先は、「市外、池袋一〇四一／石井鶴三様」である。宛名の脇に「急」と記されている。消印の日付は大正十年二月十三日、時間は午前〇時から七時、地名は判読できない。封筒裏の差出人は、「東京市京橋区灌山町四番地／東京朝日新聞発行所／土岐善麿」である。東京朝日新聞社用の封筒を使用しており、封筒裏には「大正十年二月十二日」と記されている。東京朝日新聞発行所の住所の他に、電話番号と振替口座の番号も記載されている。封筒裏は署名と日付の数字のみ肉筆である。便箋は三枚で「東京朝日新聞発行所用箋」を使用し、本文は毛筆で書かれている。

「今晚上司小剣氏に逢ひました」とあるので、土岐善麿は「東京」〈愛欲篇〉の連載の準備として、まず大正十年二月十二日の夜に、上司小剣と今後の相談をしたのであろう。次に、土岐は石井鶴三と上司小剣との「種々御打合せの機会をつくるため」、上司小剣に「来る十六日午後四時」に東京朝日新聞社へ来ることを約束させた。

石井鶴三には「同日同刻、当方へお運び下さいますやうお願ひ申上げます」という。石井鶴三の予定を無視したやり方のようにも思えるが、大正十年二月十六日に「東京朝日新聞」に「東京」〈愛欲篇〉の広告が出て、その四日後すなわち二月二十日に「東京」〈愛欲篇〉の連載が始まっていることを考慮すると、土岐が④の書簡を出

した時点で、「種々御打合せ」に時間的な余裕はなかったのである。

石井鶴三の都合さえよければ、「種々御打合せ」は土岐が設定した大正十年二月十六日の午後四時から東京朝日新聞社で行なわれたはずである。

「種々御打合せ」の内容は推測するしかないが、①の書簡で上司小剣が「尤も今度は一日くでなく前に少しまとめて書いておきたいと思ひますから、御旅行を妨げるやうなことはあるまいと存じます」と書いており、石井鶴三には画組みではなく、原稿を読んで挿絵を描いてもらうつもりであったらしいから、上司小剣の原稿や石井鶴三の画稿の受け渡しに関する確認がなされたと思われる。

また、石井鶴三は「東京」〈愛欲篇〉の挿絵にコンテ画を採用した。新聞小説の挿絵にコンテ画が用いられるのは当時としては珍しかったから、この機会に、挿絵の製版や印刷の方法についても相談したのではないだろうか。

このように、東京朝日新聞の土岐善麿は、小説家と挿絵画家の間に入って両者のつなぎ役を務めることで、「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載が円滑に進むよう尽力したのである。

三、「東京」〈愛欲篇〉新聞連載の状況

「東京」〈愛欲篇〉の連載が始まって、上司小剣は早速石井鶴三に「どうも絵が大さう結構で、感謝して居ります」と挿絵の礼を述べている。それが⑤石井鶴三宛上司小剣書簡である。

⑤石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1—30」）

拝呈。どうも絵が大さう結構で、

感謝して居ります。小説も幸ひに好評

で、(初めに書かうとした企てとは、だいぶ違つたものになつてしまひかけますが)芝居にさせてくれとか、キネマにうつさせてくれとかいふ申込みもあります。本屋も三軒

ばかりから言つて来て居ります。初め『東京』を書くに就いて、……といふものを書きま

した中へ、あなたの御挿絵のことを「不明二字 ミセケチ」

「書け 右傍挿入」

ばよかつたと残念に思つて居ります。書くつもりでゐて、急ぎ立てられたものですから、忘れてしまつたのでした。

偕お忙しいところを「おそれ入りますが□ 右傍挿入」もう少し書きため

たいと思ひながら、他の仕事もあるものですか
ら、つひあれが精いッぱいになつ「て 左傍挿入」おます。嘸
かし御厄介の事と拝察して居ります。

なほこの次ぎ(向島の朝の次ぎ)は『濱
町の家』といふのになります、其の家は濱

町三丁目一番地と掘割りに面したところで、「改ページ」

向ふ側に石屋があり、樹木の繁つた邸宅

が石屋のうしろに見えてゐるところで、女橋とい

ふ中洲へ「不明一字 ミセケチ」渡る橋の方へ寄つた「ところ ミ
セケチ」「辺 右傍挿入」で

す。あれからぐるツと男橋の方へ出て、そ

れから大「町 ミセケチ」「川 左傍挿入」「不明三字 ミセケチ」
「の 左傍挿入」岸、新大橋の辺な

ぞが出るのですが、御多忙中恐れ入ります

けれど、若し御序もありましたら、実地

を御一覽願へれば「幸 ミセケチ」「好 左傍挿入」都合と存じま
す。電車は人形町で乗りかへて、菊

川橋行きに乗つて、濱町で下りて、

狭い川の河岸を右へ「(電車の進む方から右です) 左傍挿入」行け
ば、すぐ「濱 ミセケチ」「濱 ミセケチ」

「濱 左傍挿入」町でございます。

先は御礼かたぐ、一寸お願ひまで

草々

三月五日

上司生

石井様

封筒表の宛先は、「板橋町中丸二六六/石井鶴三様」である。消印
はない。封筒裏の差出人は「東京府下目黒四一二/上司小剣」で
ある。封筒裏には上司小剣によつて「三月五日」と記されている。封
筒裏は日付の数字のみ肉筆で、その他は印刷である。便箋は二枚で
「東京文房堂製」を使用し、本文はペンで書かれている。本文の内
容が「東京」〈愛欲篇〉の話題であることから、大正十年三月五日
に書かれた手紙である。

上司小剣自身が「小説も幸ひに好評で」というように、「東京」〈愛
欲篇〉は一般読者には評判がよかつたらしい。上司小剣は「東京」

に就て」(前掲)の中で、「東京」〈愛欲篇〉は「幸ひ新聞小説としても成功した方で」、「最後の一回を新聞社に届けた日、一封の特別慰労金を贈られて、それで初めて舶来の蓄音機を買った」と回想している。なお、上司小剣の「蓄音機道楽—レコード図書館を設立したい—」(「雄弁」昭和2年10月)⁵⁾によると、上司小剣が初めて買った舶来の蓄音機は「ヴィクトローラーの一ばん安いので」、「八十円か」だったという。

さらに、⑤の書簡で上司小剣は「芝居にさせてくれとか、キネマにうつさせてくれとかいふ申込みもあります」と述べている。「読売新聞」の「よみうり抄」には、大正十年三月十三日の記事に「上司小剣氏 『朝日新聞』に連載中の長篇小説『東京』は完結後松竹キネマの手で映画劇にされる相だ」とあり、大正十年三月二十六日の記事に「上司小剣氏 『朝日新聞』に連載中の小説『東京』は川村花菱氏が脚色して六月頃某劇場に上演される」とある。「東京」〈愛欲篇〉は「東京朝日新聞」の連載が始まったばかりの大正十年三月に、既にキネマ化や芝居化の話が持ち上がったのである。しかし、「東京」〈愛欲篇〉が実際にキネマになったり、芝居で上演されたりした形跡は管見に入らなかつた。「東京」〈愛欲篇〉のキネマ化や芝居化は結局実現しなかつたのではないだろうか。

上司小剣は「初め『東京』を書くに就いて、……といふものを書きました中へ、あなたの御挿絵のことを書けばよかつたと残念に思つて居ります。書くつもりでゐて、急ぎ立てられたものですから、忘れてしまつたのでした」と、大正十年二月十八日に「東京朝日新聞」に寄せた「『東京』を書くに就て」で石井鶴三の挿絵に言及しなかつた言い訳をしている。「『東京』を書くに就て」は小説についての作者の言葉であるから、挿絵に触れなくても差支えはないはずで

ある。しかし、「『東京』を書くに就て」に、石井鶴三の挿絵について書かなかつたことを上司小剣は「残念に思つて」いたのである。このことから、上司小剣が石井鶴三の挿絵をいかに重要視していたかがわかる。

また、⑤の書簡で上司小剣は「なほこの次ぎ(向島の朝の次ぎ)は『濱町の家』といふのになります、其の家は濱町三丁目一番地と掘割りに面したところで、『御多忙中恐れ入りますけれど、若し御序もありましたら、実地を御一覽願へれば好都合と存じます』と小説の舞台である場所の詳細を知らせている。石井鶴三は「濱町」を実地踏査したらしく、「濱町の家(二)」「(大正10年3月16日掲載)の挿絵には掘割の対岸の様子が、「濱町の家(三)」「(大正10年3月17日掲載)には大川を背景に川端で水面を眺める主人公の後姿が描かれていて、上司小剣が案内した辺りを実際に見てから挿絵を描いた様子が窺える。

大正十年二月十六日と翌十七日に「東京朝日新聞」に掲載された「小説予告」には、小説「東京」について「東京に放浪した一青年の手記を中心にして、この多くの人間が『偶然に集合』した大都会の美しい半面と醜い半面とを大きな背景に取り入れた小説であります」と説明されていた。

「東京」〈愛欲篇〉では、春田・濱江・吉松・小夜子の痴情の纏れによる愛憎が描かれるとともに、繁榮と衰微、連帯と孤独が混在する東京の明暗が描出されている。

「東京」〈愛欲篇〉は、「日比谷の夕」「向島の朝」「濱町の家」「三緑山の泣姫」「愛宕山」「花の上野」「若葉の清水谷」「ホテルにて」「郊外の病院」の章からなり、章題の通り、様々な東京の景色が登場する。

石井鶴三は、①の書簡にあった「『東京』といふ、人間の偶然的集合場所の雑然とした色合ひを主にして書かうとするもの」という上司小剣の創作意図をよく理解し、小説の挿絵といえども人物中心になり背景はなおざりにされがちなることを、人物描写だけでなく、背景描写にも力を入れて「東京」へ愛欲篇の挿絵を描いた。石井鶴三は「東京」へ愛欲篇の挿絵制作について、「上司小剣」心に残る寸語雙語（前掲）の中で、「東京」へ愛欲篇は「はじめて東京へ出てきた春田影彦という青年と、海野浜江という若い女性との愛情が中心になっているのだが、そのあいだに閨秀作家、画家、老文学士などが登場し、舞台は日比谷、向島、浜町、芝公園、愛宕山、上野、清水谷と、明治のにおいの残っていた東京風景がつぎつぎあらわれ、挿絵をかく方もおもしろくてたのしく仕事が出来た」と回想している。

そのような石井鶴三の仕事ぶりを見て、上司小剣は「今私が『朝日』に書いてある長篇『東京』も、例によつて石井氏に挿絵を頼んでゐるが、氏は挿絵をば小説から離れても独立し得る『新東京絵巻』を作る積りで力を入れてゐられるから、完結の上は単独にしても芸術品として完備されたものになるだらう」（前掲「挿絵画家は作家の女房」と述べた。上司小剣の予告した通り、「東京」へ愛欲篇の挿絵は高く評価され、石井鶴三の代表作の一つとなつたのである。

⑤の書簡で、上司小剣は「儲お忙しいところをおそれ入りますかもう少し書きためたいと思ひながら、他の仕事もあるものですから、つひあれが精いつぱいになつてゐます。嘸かし御厄介の事と拝察して居ります」と謝っている。石井鶴三に挿絵を依頼した①の書簡で、上司小剣は「尤も今度は一日くでなく前に少しまとめて書いておきたいと思ひますから、御旅行を妨げるやうなことはあるまいと存

じます」と約束していたが、この頃から次第に原稿を書き溜めることが難しくなつていたようである。

さらに、⑥石井鶴三宛上司小剣書簡では、石井鶴三に原稿を渡すことが出来ず、画組みで挿絵を描いてくれるように頼んでいる。

⑥石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1—219」）

先日は失礼いたしました。大阪からのお葉がき拝見。御弟様の御病気はいかゞでございます。

儲今度は小生が旅行で、当分「不明一字 ミセケチ」「画 左傍挿入」ぐみでお描き

を願はなければならぬのですが、当方より直接お送りするよりも、朝日社の方へ画ぐみを

送つた方が便利であらうと思ひまして、今日84

85 86 三回分の画ぐみを出しました。87 88 89の

三回は多分原稿でお描きを願へること、思ひます。

それから九十二三回まで、また絵「不明一字 ミセケチ」ぐみでお願い致します。

（五月十一日）

封筒表の宛先は、「府下。板橋町字中丸二六六／石井鶴三様」である。消印の日付は大正十年五月十一日、時間は午前九時から十時、

地名は「白金」である。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣（印）」である。便箋は一枚で、本文はペンで書かれている。

「大阪からのお葉がき拝見。御弟様の御病気はいかゞでございます」とあるように、この時、石井鶴三の弟の四郎は、病氣であつた。

石井鶴三は大正十年五月に奈良に行き、大阪で四郎を見舞っている。石井鶴三から上司小剣が受け取った「大阪からのお葉がき」には、弟の四郎が病気であり、弟の見舞いで大阪に来ていることが記されていたと推察される。なお、大正十年五月十一日に四郎は三十三歳で亡くなっている。

⑥の書簡には「今度は小生が旅行で」とあるが、確かに上司小剣は五月中旬から下旬にかけて関西方面に出かけている。「読売新聞」の「よみうり抄」には、大正十年五月八日の記事に「上司小剣氏 中旬関西に旅行する」と予告されており、大正十年五月三十日の記事には「上司小剣氏 昨日京阪より帰京す」と報じられている。なお、上司小剣はこの頃、毎月のように関西を訪れていたらしく、「よみうり抄」の大正十年三月六日の記事には「上司小剣氏 目下関西地方巡遊中」とあるし、大正十年三月十四日の記事には「上司小剣氏 来月上旬関西に赴く」と記されている。

⑥の書簡で、上司小剣は「当方より直接お送りするよりも、朝日社の方へ画ぐみを送った方が便利であらうと思ひまして、今日848586三回分の画ぐみを出しました」と報告しているが、上司小剣が東京朝日新聞社に送った「848586三回分の画ぐみ」は、後日、東京朝日新聞社から石井鶴三に送られたようだ。それが、⑦石井鶴三宛上司小剣書簡である。

⑦石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書6—49」）

『東京』848586 三回分絵ぐみ

花の上野 七 夕暮

まだ明るい

上野公園の奥の深山の光景にも似た寂しいところの崖の上に、梢の枯れかゝつた櫛けやき

大木（三月半ばの暴風に倒れたので「すが、倒れた 左傍挿入」）「まだ葉が伸びてゐないので、出かゝつた芽が其のまゝ萎んでゐる ミセケチ」

まゝに若葉「の芽 右傍挿入」を出してゐる。の上へ春田が跨がる。下から濱江が見「上 左傍挿入」げてゐる。

花の上野 八 夕暮

稍暗い

上野公園の奥。桜木町の閑静なところ

ろに、「囃 ミセケチ」（囃）こんな風ふうの木の柱の二本立つた門の

潜り口

ある二階家「小夜子の新店」左傍挿入」の前に、春田と濱江とが

「門の 右傍挿入」標札

を見つづ濱江の「西 ミセケチ」洋傘（黒地で縁の方に五寸幅ぐらゐの紫のしぼりがある）を奪ひ合ふ。

花の上野 九 夕暮

殆ど夜

上野桜木町の新居の茶の間（例の瀬戸

大火鉢を置く。)に小夜子が裁縫をしてゐ

るところへ、不意に春田と濱江が訪問し、「不明一字 ミセケチ」小夜子は

大に狼狽し(裁縫をしてゐたので恥づる意味で)縫ひかけ

の「自分の 右傍挿入」着物や、針箱(桑の木で作つた長方形の)を大急ぎで「不明一字 ミセケチ」隠さうとする。

⑦の書簡は便箋のみで封筒はない。便箋は一枚で「東京文房堂製 原稿用紙」を使用し、本文はペン書きである。なお、原稿用紙左上部に欠損がある。

⑦の書簡には日付がないが、⑦の書簡は⑥の書簡と同じ大正十年五月十一日に東京朝日新聞社へ送られたはずなので、東京朝日新聞社から石井鶴三のもとに画組みが届いたのは、十二日か十三日だと推察される。

「花の上野(七)」は大正十年五月十四日に、「花の上野(八)」は十五日に、「花の上野(九)」は十六日に紙上に掲載されている。石井鶴三は十二日か十三日に届いた画組みで十四日掲載分の挿絵を描いたことになる。この時、石井鶴三は締切に追われ、ごく短時間で挿絵を仕上げなければならなかつたであろう。

原田譲二は『『東京』の頃』(前掲)の中で、「東京」〈愛欲篇〉の入手状況について、「上司君はその頃中外商業新報にも長篇小説を書いてゐましたが、そのために朝刊の小説が追はれるといふやうなことはありませんでした。はじめ十回ほど書きためておいて、それから毎日一回づゝキチン／＼と、速達で送つて来ました。編集者にとつて、これほど有難いことはありません」と語っているが、⑥の書簡から、実際は度々の関西旅行などで「東京」〈愛欲篇〉の執筆が計画

通り進まず、上司小剣は自転車操業で原稿を書いていたことがわかる。そのために石井鶴三もまた、挿絵の制作をタイトなスケジュールでこなさなければならなかつたのである。

新聞連載小説の場合、小説家の執筆が滞れば、挿絵画家に負担がかかる。原稿によつて物語の展開を知つた上で挿絵を描くのではなく、画組みだけで場面に合つた挿絵を描くのは、小説家との意思の疎通と作品に対する深い理解がなければ難しいであろう。石井鶴三の「花の上野(七)」「花の上野(八)」「花の上野(九)」の挿絵は、上司小剣の画組みを忠実に表現している。ただし、「花の上野(七)」の挿絵には横倒しになつた櫓の太木に春田が跨るところが描かれているのだが、小説の中で春田が太木に跨る記述が出てくるのは「花の上野(八)」の冒頭である。挿絵が小説の展開を先取りするような形になっているが、これは上司小剣が自分で考えた「花の上野(七)」の画組みに合わせて、小説を執筆しなかつたからである。

次の⑧の書簡は、上司小剣が石井鶴三に挿絵の制作のために送つた「東京」〈愛欲篇〉一三回の原稿に注意書きを足してほしいと頼んだものである。

⑧石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-218」)

一度お伺ひしたいと思ひながら失礼してゐます。御奥様の御病気がか。

先日は失礼いたしました。毎々有り難く存じます。今日お手元へ差し上げました原稿。

百十三回。

ホテルにて一

の (函) (六月九日)

コゝのところへ御面倒ですが、赤い字で、

「小みだしかはる注意 丸囲み」とお書き入
れ下さいませんか

封筒表の宛先は、「府下。板橋町字中丸二六六／石井鶴三様」である。消印の日付と地名は判読できないが、時間は午後三時から四時である。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣」(印)である。便箋は一枚で、本文はペンで書かれている。用件が「東京」〈愛欲篇〉の原稿についてであるから、大正十年六月九日に書かれた手紙である。

「御奥様の御病気いかが」というので、この頃、石井鶴三の妻の美佐は病氣であつたようだ。

上司小剣は、石井鶴三に「ホテルにて(一)」の原稿の「コゝのところへ御面倒ですが、赤い字で、「小みだしかはる注意」とお書き入れ下さいませんか」と頼んでいる。本来なら、植字工に対して組版の指示を出すのは、新聞の編集担当者である。しかし、新聞紙面の編集経験があり、「新聞のコツを知りぬいて」いた上司小剣は、自分の原稿に組版の注意まで記入していたのである。

⑧の書簡を読んで、石井鶴三は預かっていた原稿に注意書きをしたのであろう、大正十年六月十二日に紙上に掲載された一三回の小見出しは確かに「ホテルにて(一)」になっている。

四、補遺 単行本『花道』の挿絵と装幀

拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して——石井鶴三宛上司小剣書簡から——」(前掲)では、上司小剣の「森の家」と「花道」の挿絵と装幀に関する書簡十通(石井鶴三宛上司小剣書簡8通、嶋中雄作宛上司小剣書簡1通、上司小剣宛三井玉輝書簡1通)を紹介しながら、小説家と挿絵画家との関係を考察した。先にも述べたが、その後の調査で、信州大学所蔵石井鶴三関連資料から上司小剣の「花道」に関する書簡が新たに六通(石井鶴三宛上司小剣書簡3通、石井鶴三宛三井玉輝書簡2通、石井鶴三宛玄文社書簡1通)が発見されたので、この章で紹介する。

⑨ 石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1—220」)

招待券有り難く存じました。一日には二科の方と両方へ是非あまりたいと存じて居ります。挿絵ながく有り難く存じました。非常に好評で、厚く御礼申し上げます。百六十回まで、すから、十日頃完結と存じます。いづれ全部校訂の上出版したいと存じて居りますから、その節はまた絵をお願いいたします。

葉書表の宛先は、「府下。田端二八二。／石井鶴三様」である。消印の日付は大正九年八月三十一日、時間と地名は判読できない。差

出人は「東京、下目黒四二ノ上司小剣」(印)である。上司小剣によつて、「八月三十日」と記されている。葉書表の宛先と日付、葉書裏の本文はペン書きである。

「招待状」とは、おそらく「再興第七回日本美術院展覧会」の招待状であろう。再興第七回日本美術院展覧会は大正九年九月一日から同月二十九日まで、上野公園竹之台陳列館で開催された。石井鶴三はこの院展に「八ヶ岳の春」(三点)と「浴泉」を出品している。⁷⁾

同時期に第七回二科展が開催されている。第七回二科展の会期は大正九年九月二日から同月二十九日までで、美術院展覧会と同じく会場は上野公園竹之台陳列館であった。⁸⁾

会場が同じ場所であったからであろう、上司小剣は「一日は二科の方と両方へ是非ありたい」と書いているが、石井鶴三に知らせた通り、九月一日に上野公園竹之台陳列館に行つたのなら、美術院展は鑑賞できても、二科展は見る事ができなかったはずである。

「挿絵ながく、有り難く存じました」というのは、「時事新報」に連載された「花道」の挿絵である。「百六十回まで、すから、十日頃完結と存じます」と知らせているように、「花道」は大正九年四月五日から九月十一日まで「時事新報」の夕刊に計一六〇回連載された。上司小剣が書いているように「花道」の挿絵は「非常に好評で」、石井鶴三は「花道」の挿絵で挿絵画家として注目されるようになった。

⑨の書簡の「いづれ全部校訂の上出版したいと存じて居りますから、その節はまた絵をお願いいたします」という依頼を受けて、単行本『花道』の挿絵と装幀も石井鶴三が手がけた。

しかし、単行本の挿絵をめぐって石井鶴三と出版社との間にトラブルが生じる。

単行本『花道』の挿絵は、石井鶴三が「時事新報」に残っていた

原画からよいものを選び、さらに新しく三、四枚描くことになっていた。「新年の売り出し」に向けて『花道』の出版を急いでいた玄文社の三井玉輝は、石井鶴三が「さしゑとり上げきりでこまりをり候」(大正9年11月20日上司小剣宛三井玉輝書簡 仮番号「書6—47B」)と上司小剣に葉書で訴える。上司小剣がその葉書を石井鶴三に転送してしまつた(大正9年11月21日石井鶴三宛上司小剣書簡 仮番号「書6—47A」)ために、石井鶴三が立腹したのである。

上司小剣は石井鶴三に宛て、詫状をしたため、「三井氏の態度や言葉は私からお詫びいたしますから、装幀其の他も前からの計画通り願ひできませんでせうか」(大正9年11月24日石井鶴三宛上司小剣書簡 仮番号「書6—46」)と懇願した。そして、「今一度御返事下さらば其の上で本の寸法を早く決めるやうに言ふなり、又は断るなり、いづれともきめます」と約束した。

玄文社の三井玉輝が石井鶴三に先のトラブルについて弁解をし、「本の寸法」を知らせたのが、次の⑩石井鶴三宛三井玉輝書簡である。

⑩石井鶴三宛三井玉輝書簡(仮番号「書1—96」)

拝復先日は夜
分御邪魔いた
し失礼仕り候
さてその翌々日に

失礼とは存候
ひしがハカキを
以つて寸法を

申上候と同時に

絵稿拝借物
 であると同時に
 仕事が入合つ
 てゐる事を
 思ひ御選定
 の上は至急
 に御返戻に預
 り度き 被旨
 申上候 然るに
 郵便物不着
 の為め「か 右傍挿入」変な事
 に相成 御不快
 を買ひ候如は甚
 だ恐縮に御座候
 平に御免被下
 度願上候
 上司氏へ申上候
 理由は先生
 の原稿約束日
 より後れ候為めその方の
 催促の心地も
 含まれ全体を
 促進の心地があ
 った故に候別に
 其の他に悪意
 無きことに御座候

先は御詫び
 旁々御願ま
 で如斯に御座候

草々

十一月二十四日

三井玉輝

石井鶴三様

侍史

(箱、表紙／見返し／カット 右挿入)

次に

寸法重ねて申上候

箱、見返しも共に御願申上度候

(図1) (縦六寸、横三寸五分、束一寸)

に候 天地左右は可然
 余裕を御残し願上度候

(図2) (縦2.5横5)

書留で出された封筒表の宛先は、「市外田畑二八二／石井鶴三様」
 である。消印の日付は大正九年十一月二十四日、時間と地名は判読
 できない。封筒裏の差出人は、「東京市芝公園九号地／新家庭新演芸

発行所玄文社／三井玉輝」である。玄文社用の封筒を使用しており、玄文社の住所の他に、電話番号と振替口座の番号も記載されている。また、三井玉輝によって「大正九年十一月二十四日」と日付が記入されている。封筒裏は、署名と日付の数字のみ肉筆で、その他は印刷である。巻紙で、本文は毛筆で書かれているが、「箱、表紙／見返し／カット」のメモと「図2」は鉛筆書きである。「図1」は単行本『花道』の寸法を記した図である。

⑩の書簡の冒頭には「先日は夜分御邪魔いたし失礼仕り候」とあるので、三井玉輝は単行本『花道』の挿絵と装幀の打ち合わせに石井鶴三を訪ねたのである。そして「その翌々日に」、単行本『花道』の寸法と、「絵稿」が「時事新報」からの「拝借物である」こと、「御選定の上は至急に御返戻に預り度き」ことを記した葉書を送ったという。しかし、「郵便物不着の為めか変な事に相成」と、石井鶴三との間に行き違いが生じてしまったことの言い訳をしている。また、上司小剣に「石井さんがさし系とり上げきりでこまりをり候」と訴えた理由を、「先生（引用者注・上司小剣のこと）の原稿約束日より後れ候為めその方の催促の心地も含まれ全体を促進の心地があつた故に候別に其の他に悪意無きことに御座候」と述べている。

⑩の書簡で注目されるのは、「箱、見返しも共に御願申上度候」とあることだ。単行本『花道』には「箱」があつたのである。筆者がこれまでに見つけた単行本『花道』はいずれも箱がなく、未だに箱の現物は確認できていない。

上司小剣と三井玉輝とが非礼を詫び、仕事の継続を懇願したからであろう、石井鶴三は単行本『花道』の挿絵と装幀の仕事を途中で放り出すことはしなかった。

それを知り、上司小剣は石井鶴三に⑩の礼状を出している。

⑪ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1-221」）

お手紙拝見。漸く安心

いたしました。本は「第二でもよろしく、ミセケチ」第二として、

左傍挿入」

あなたのお気持ち

のなほつたのを欣んで居り

ます。御礼まで。

十一月二十八日

葉書の宛先は、「府下。田端二八二。／石井鶴三様」である。消印の日付は大正九年十一月二十九日、午前九時から十時、地名は「白金」である。差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣（印）」である。葉書表の宛先と日付、葉書裏の本文はペン書きである。

上司小剣は「漸く安心いたしました。本は第二として、あなたのお気持ちのなほつたのを欣んで居ります」と述べている。「本」というのは単行本『花道』のことである。上司小剣は「本は第二として」と述べ、石井鶴三との関係が修復されたことを第一に喜んでいる。上司小剣にとって挿絵画家は誰でもよいというわけではなかった。上司小剣は「挿絵画家は作家の女房（前掲）において、小説家と挿絵画家の関係は、「小説を書く人と挿絵を書く人とは相互に共通点があつて」「この作者にはこの画家といふことが夫婦関係のやうにピッタリと合ふことが必要である」と述べている。両者の共通点は、芸術上の挑戦にあると思われる。上司小剣は軽視されがちだった新聞小説を芸術小説にすることを目指し、石井鶴三は新聞の挿絵を小説から離れても独立し得る芸術品にしようと努めていた。また、「画家

の方からも十分に小説の方の作意を了解し、小説家の方からも画家の心持をよくわかるといふ工合でなければいけない」というので、上司小剣の意図を汲んで挿絵を描いてくれる石井鶴三は、上司小剣にとってベストパートナーだったのである。

石井鶴三は急いで挿絵の選択と制作を済ませ、大正九年十二月六日には玄文社に送ったようである。それがわかるのが、⑫石井鶴三宛三井玉輝書簡である。

⑫石井鶴三宛三井玉輝書簡（仮番号「書1—95」）

拝復

御多用中

さしゑ

御揮毫いただ

き厚く御礼

申上候

さて

其の節小生拝

趨の際持参い

たし候さしゑ

旧稿（四十九枚）は

御手数恐れなか

ら時事新報

社より拝借いた

し候もの故何

卒御保存な

し置き被下度
願入候

その内当方より

頂戴に差出し

申候

尤も

四十九枚のう

ち十六枚ほど

は只今新規の分

と同時に落手い

たし申候

さすれば残りは

三十三枚に御座候

もし御序の節

御返送いただけれ

ば誠に幸に御座候

先は御礼旁々

重ねて御願ま

で如斯に御座候

草々

十二月六日

三井玉輝

石井鶴三様

侍史

封筒表の宛先は、「府内田畑二八二ノ石井鶴三様」である。消印の

日付は大正九年十二月六日、時間と地名は判読できない。封筒裏の差出人は、「東京市芝公園九号地／新家庭新演芸発行所玄文社／三井玉輝」である。玄文社用の封筒を使用しており、玄文社の住所の他に、電話番号と振替口座の番号も記載されている。また、三井玉輝によって「大正九年十二月六日」と日付が記入されている。封筒裏は、署名と日付の数字のみ肉筆で、その他は印刷である。巻紙で、本文は毛筆で書かれている。

三井玉輝は、「御多用中さし系御揮毫いただき厚く御礼申上候」と礼を述べている。しかし、注目したいのはその後である。三井玉輝は「さし系旧稿（四十九枚）は御手数恐れながら時事新報社より拝借いたし候もの故」、「その内当方より頂戴に差出し申候」「御序の節御返送いただければ誠に幸に御座候」と、石井鶴三に「花道」の画稿の返却を求めている。「花道」の挿絵画稿については、玄文社と時事新報社との間で使用貸借契約が結ばれていたようである。つまり、「花道」の挿絵画稿の所有権は、制作者である石井鶴三ではなく、時事新報社にあったのである。

先のトラブルもあつてか、単行本『花道』の出版準備では、著者である上司小剣が玄文社と石井鶴三との取り次ぎをしていたようである。⑬石井鶴三宛上り小剣書簡からも、その様子が窺える。

⑬石井鶴三宛上り小剣書簡（仮番号「高1—231」）

お葉がき拝見。森ヶ崎への御書もたしかに拝見しました。それであの葉がきを差し上げたのでした。いろいろ有り難く存じました。画の校正は御覽に

入れたでせうか。間に合はなかつたら、（新年の売り出しは「今 左傍挿入」七日が大取次の締切りださうです）初版だけ絵なしに願ひたいな
 ども申し居りました。 十二月七日

葉書表の宛先は、「府下。板橋中丸二八二／石井鶴三様」である。消印はない。差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣」（印）である。差出人以外はペンで書かれている。

「読売新聞」の「よみうり抄」の大正九年十二月一日の記事には「上司小剣氏 来る三日頃森ヶ崎または稲毛に旅行とあり、大正九年十二月十日の記事には「上司小剣氏 十二日頃帰京すると」とあるので、上司小剣は大正九年十二月三日頃から十二日頃まで森ヶ崎に滞在していたことがわかる。

石井鶴三は単行本『花道』の挿絵と装幀の件で上司小剣に「森ヶ崎への御書」や「お葉書き」を出したのであろう。上司小剣は「画の校正は御覽に入れたでせうか」と問い合わせている。しかし、石井鶴三のところに画稿の校正は届いていなかったらしく、大正九年二月二十日（推定）石井鶴三宛上り小剣書簡（仮番号「書6—45」）の中で、上司小剣は「校正をお眼にかけなかつたさうで、何んとも恐れ入れました」と謝っている。

⑬の書簡で、上司小剣は「間に合はなかつたら、（新年の売り出しは今七日が大取次の締切りださうです）初版だけ絵なしに願ひたいなどとも申し居りました」と玄文社の意向を伝えていたが、結局「新年の売り出し」には間に合わなかつたようである。単行本『花道』は大正九年二月三十日⁹に玄文社より刊行された。

単行本『花道』の出版前に、玄文社から石井鶴三に「花道装幀料」

が支払われている。その時の送金伝票が⑭石井鶴三宛玄文社書簡である。

⑭石井鶴三宛玄文社書簡（仮番号「書1—94」）

送金伝票

金額 金貳拾「五 右傍挿入」円也 「印」

題号 花道装幀料

備考 「印」

右御送金申上候間御查收被成下度尚御面倒恐入

候へども別紙領収証折返し御送附の程奉願候

大正十年一月二十八日 東京市芝公園九号地

玄文社会計課「印」

石井鶴三殿

「割印」

書留・親展で出された封筒表の宛先は、「市外池袋一〇四一／石井鶴三様」である。消印の年月は判読できないが二十九日、二時から三時（午前か午後かは判読できない）、地名は判読できない。封筒裏の差出人は「東京市芝公園九号地／振替口座東京一四一七七番／電話芝六六九七・七二七五番／新家庭新演芸発行所玄文社」である。送金伝票は、金額の「金貳拾五円也」、題号の「花道装幀料」、宛名の「石井鶴三」のみ肉筆で、日付は印、あとは印刷である。送金伝票の日付は大正十年一月二十八日である。「花道装幀料」は二十五円であった。恐らく新たに制作した挿絵の画料もこの中に含まれて

いるのであろう。単行本『花道』の定価は二円五十銭だから、「花道装幀料」は単行本『花道』十冊分ということになる。

おわりに

上司小剣も回想したように、「東京」〈愛欲篇〉は「幸ひ新聞小説としても成功した方で」（前掲「東京」に就て）であった。岡田三郎が「新年随筆（六）」（「時事新報」大正14年1月21日）の中で、「卑俗ならざるものに、石井鶴三氏の挿絵がある。上司小剣氏の『東京』が『朝日』に載つてゐた頃、鶴三氏の挿絵を見るのが毎日の楽しみであつた」と評したように、「東京」〈愛欲篇〉の成功には石井鶴三の挿絵の魅力もあつたことは否定できない。

石井鶴三の挿絵は小説世界と見事に合致していた。しかし、その背景には上司小剣の石井鶴三に対する厚い信頼があり、石井鶴三の上司小剣やその作品に対する深い理解があつた。今紹介した「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載に関する書簡から、相互理解に基づいた上司小剣と石井鶴三の共同作業の様子が具体的に見えてきたことで、両者の密接な関係を確認することができた。

また、小説家と挿絵画家との間に、新聞の担当者が介在し、積極的に仲介役を務めることで、両者の共同作業を支えていた事実が明らかになった。小説家と挿絵画家と、そして新聞の担当者の三者の努力によって、「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載は成功したと言っても過言ではない。

あわせて、本稿では上司小剣の「東京」〈愛欲篇〉が「東京朝日新聞」に連載されたいきさつや理由などについても言及した。今回詳らかにした「東京」〈愛欲篇〉の新聞連載の事情は、当時の新聞に

おける新聞小説の位置や新聞小説の変遷を考える上でも、有用な材料を提出しているように思う。

注

- (1) 当時、『読売新聞』は全従業員に休養を与えるため、毎年末三十日を休業していた。そのため、十二月三十一日は休刊となる。大正九年十二月二十八日の『読売新聞』にも「休刊に付謹告」の社告が掲載され、大正九年十二月三十一日は休刊であった。土岐善磨は大正九年十二月三十一日の夜に、大正十年一月一日の「読売新聞」を読んで、上司小剣の「今年は何を書くか―長篇『東京』」を見つけたというが、上司小剣の「『東京』に就て」（『長篇文学全集第16巻へ上司小剣篇』）「長篇小説月報」第9号、昭和3年11月1日、新潮社）によると、「それ（引用者注・「今年は何を書くか―長篇『東京』」をさす）が十年の元旦の新聞に載つてゐるのを、私がまだ見ない大晦日の夜半十二時頃」とあるので、東京朝日新聞社には一般家庭より早く、前日のうちに大正十年一月一日の「読売新聞」が届いていたのだと思われる。

(2) 参考までに原田譲二と土岐善磨の略歴を次に記しておく。

原田譲二（1885—1964）は、詩人、新聞記者。筆名はゆづる。岡山県後月郡西江原に生まれる。明治三十九年頃、「文庫」や「早稲田文学」などに詩や小説を発表し、活躍した。明治四十一年に早稲田大学英文科を卒業後、報知新聞社や読売新聞社に勤務。大正四年、東京朝日新聞社に入社し、大正八年に社会部長となる。大正十四年、大阪朝日新聞社に転じ、編集局長を経て、昭和十五年に同社専務になった。著書に『欧米新聞遍路』（大正15年3月1日、日本評論社）や『インク街に播く』（昭和5年3月5日、一元社）などがある。

土岐善磨（1885—1980）は、歌人。号は哀果。東京市浅草区松清町に生

まれた。明治三十七年、早稲田大学英文科に入学し、島村抱月に師事。窪田空穂の第一詩歌集『まひる野』（明治38年）に感銘を受け、作歌に励む。明治四十一年に大学を卒業後、読売新聞に入社、社会部の記者となる。大正六年に社会部長となつて、東京遷都五十年記念行事として京都・東京間の東西対抗駅伝競争を企画し、大成功を収めた。大正七年に東京朝日新聞に移り、昭和十五年まで在社。戦後、早稲田大学で上代文学担当の講師となり、国語審議会会長、日比谷図書館長などを兼任した。

- (3) 高木健夫編『新聞小説史年表』（昭和62年5月30日、国書刊行会）を参照した。
- (4) 「東京」〈愛欲篇〉の画稿については、『石井鶴三全集 第二巻』（昭和61年7月18日、形象社）の「東京」〈愛欲篇〉の解説を参照した。
- (5) 引用は上司小剣『蓄音機読本』（昭和11年6月20日、文学界社出版部）による。
- (6) 上司小剣「花智」（『中外商業新報』大正10年5月18日）同年11月13日）のこと。
- (7) 『日本美術院百年史 四巻』（平成6年5月、日本美術院）を参照した。
- (8) 『二科七十年史』（昭和60年8月26日、二科会）を参照した。
- (9) 発行日は奥付の記載に従った。

参考文献

- 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（全6巻、昭和52年11月18日）53年3月15日、講談社）
- 『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』（平成3年10月1日、朝日新聞社）
- 『読売新聞発展史』（昭和62年11月2日、読売新聞社）
- 『読売新聞百二十年史』（平成6年11月2日、読売新聞社）
- 『石井鶴三日記 第一巻』（平成17年3月17日、形文社）
- 『石井鶴三展―芸術は白刃の上を行くが如し』（平成21年10月10日、松本市美術館）